

# 月とあざらし

小川未明

青空文庫



北方ほつぽうの海うみは、銀色ぎんいろに凍こおっていました。長い冬なが ふゆの間あいだ、太陽たいようはめつたにそこへは顔かおを見せなかつたのです。なぜなら、太陽たいようは、陰気いんきなところは、好すかなかつたからでありました。そして、海うみは、ちようど死しんだ魚うおの目めのように、どんよりと曇くもつて、毎日まいにち、雪ゆきが降ふっていました。

一ひびきの親おやのあざらしが、氷ひょうざん山さんのいただきにうづくまつて、ぼんやりとあたりを見みまわしていました。そのあざらしは、やさしい心こころをもつたあざらしでありました。秋あきのはじめに、どこへか、姿すがたの見えなくなつた、自分じぶんのいとしい子供こどものことを忘れわすれずに、ここうして、毎日まいにちあたりを見みまわしているのです。

「どこへいったものだろう……今日も、まだ姿は見えない。」

あざらしは、こう思っていたのでありました。

寒い風は、頻りに吹いていました。子供を失った、あざら

しは、なにを見ても悲しくなりませんでした。その時分は、青

かった海の色が、いま銀色になっているのを見ても、また、体

に降りかかる白雪を見ても、悲しみが心をそそつたのでありま

す。

風は、ヒュー、ヒューと音をたてて吹いていました。あざらし

は、この風に向かっても、訴えずにはいられなかったのです。

「どこかで、私のかわいい子供の姿をお見になりませんでしたか

。」と、哀れなあざらしは、声を曇らして、たずねました。

いままで、傍若無人ぼうじゃくぶじんに吹ふいていた暴風あらしは、こうあざらしに  
 問といかけられると、ちよつとその叫さけびをとめました。

「あざらしさん、あなたは、いなくなつた子供こどものことを思おもつて、  
 毎まい日にちそこに、そうしてうずくまつていなさるのですか。私わたしは、

なんのために、いつまでも、あなたがじつとしていなさるのかわ

からなかつたのです。私わたしは、いま雪ゆきと戦たたかっているのです。この海うみ

を雪ゆきが占せん領りょうするか、私わたしが占せん領りょうするか、

命いのちがけの競きよう争そうをしているのですよ。さあ、私わたしは、たいていこ

のあたりの海うみの上うえは、一ひと通とりくまなく馳かけてみたのですが、あ

ざらしの子供こどもを見みませんでした。氷こおりの蔭かげにでも隠かくれて泣ないている

のかもしれませんが……。こんど、よく注ちゆう意いをして見みてきてあ

げましよう。」

「あなたは、ごしんせつな方かたです。いくら、あなたたちが、寒さむく、冷つめたくても、私わたしは、ここに我慢がまんをして待まっていますから、どうか、この海うみを馳かけめぐりなさるときに、私わたしの子供こどもが、親おやを探さがして泣ないていたら、どうか私わたしに知らせてください。私わたしは、どんなところであろうと、氷こおりの山やまを飛とび越こして迎むかえにゆきますから……。」「と、あざらしは、目めに涙なみだをためていました。

風かぜは、行いく先さきを急いそぎながらも、顧かえりみて、

「しかし、あざらしさん、秋あきごろ、獵りよう船せんが、このあたりまで見みえましたから、そのとき、人にんげん間とに捕とられたなら、もはや帰かえりつこはありませんよ。もし、こんど、私わたしがよく探さがしてきて見みつか

らなかつたら、あきらめなさい。」と、風かぜはいい残のこして、馳かけて  
ゆきました。

その後あとで、あざらしは、悲かなしそうな声こえをたててないたのです。  
あざらしは、毎まいにち日かぜ、風かぜの便たよりを待まっていました。しかし、一  
度ど、約やくそく束そくをしていった風かぜは、いくら待まつてももどつてはこなか  
つたのでした。

「あの風かぜは、どうしたろう……。」

あざらしは、こんどその風かぜのことも気きにかけずにはいられませ  
んでした。後あとからも、後あとからも、頻しきりなしに、風かぜは吹ふいていまし  
た。けれど同おなじ風かぜが、ふたたび自じぶん分ぶんを吹ふくのをあざらしは見みませ  
んでした。

「もし、もし、あなたは、これから、どちらへおゆきになるのですか……。」「と、あざらしは、このとき、自分の前を過ぎる風に向かつて問いかけたのです。

「さあ、どこということではできません。仲間が先へゆく後を私たちは、ついてゆくばかりなのですから……。」「と、その風は答えました。

「ずっと先へいった風に、私は頼んだことがあるのです。その返事を聞きたいと思っっているのですが……。」「と、あざらしは、悲しそうにいいました。

「そんなら、あなたとお約束をした風は、まだもどつてはこないのでしょうか。私が、その風にあうかどうかかわらないが、あつ



たら、言伝ことづてをいたしましたよう。」と行って、その風かぜも、どこへとなく去さつてしまいました。

海うみは、灰色はいいろに、静しずかに眠ねむっていました。そして、雪ゆきは、風かぜと戦たたかつて、砕くだけたり、飛とんだりしていました。

こうして、じつとしていゝうちに、あざらしはいつであつたか、月つきが、自分じぶんの体からだを照てらして、

「さびしいか？」といつてくれたことを思おもい出だしました。そのとき、自分じぶんは、空そらを仰あおいで、

「さびしくて、しかたがない！」といつて、月つきに訴うったのでした。

すると、月つきは、物もの思おもい顔かおに、じつと自分じぶんを見みていたが、その

まま、黒くろい雲くものうしろに隠かくれてしまったことをあざらしは思おもい出だ

したのであります。

さびしいあざらしは、毎日、毎夜、氷山のいただきに、うずくまって我が子供のことを思い、風のたよりを待ち、また、月のことなどを思っていたのであります。

月は、けっして、あざらしのことを忘れはしませんでした。太陽が、にぎやかな街をながめたり、花の咲く野原を楽しそうに見下ろして、旅をするのところが、月は、いつでもさびしい町や、暗い海を見ながら旅をつづけたのです。そして、哀れな人間の生活の有り様や、飢えにないている、哀れな動物などの姿をながめたのであります。

子供をなくした、親のあざらしが、夜も眠らずに、氷山の

上で、悲しみながらほえているのを月がながめたとき、この世のなか中のたくさんな悲しみに、慣れてしまつて、さまで感じなかつた月も、心からかわいそうだと思ひました。あまりに、あたりの海は暗く、寒く、あざらしの心を楽しませるなにもなかつたからです。

「さびしいか？」といつて、わずかに月は、声をかけてやりましたが、あざらしは、悲しい胸のうちを、空を仰いで訴えたのでした。

しかし、月は、自分の力で、それをどうすることもできませんでした。その夜から、月はどうかして、この憐れなあざらしをなぐさめてやりたいものと思ひました。

ある夜、月は、灰色の海の上を見下ろしながら、あのあざらしは、どうしたであろうと思ひ、空の路を急ぎつつあったのです。やはり、風が寒く、雲は低く、氷山をかすめて飛んでいました。はたして、哀れなあざらしは、その夜も、氷山のいただきにうづくまつていました。

「さびしいか？」と、月はやさしくたずねました。

このまえよりも、あざらしは、幾分かやせて見えました。そして、悲しそうに、空を仰いで、

「さびしい！ まだ、私の子供はわかりません。」と、いつて、月に訴えたのであります。

月は、青白い顔で、あざらしを見ました。その光は、憐れな

あざらしのからだ体を青白くいろどったのでした。

「わたし私は、世よの中なかのどんなところも、見みないところはない。遠とおくい国のおもしろい話はなしをしてきかせようか？」と、月つきは、あざらしにいました。

すると、あざらしは、頭あたまを振ふつて、

「どうか、私わたしの子供こどもが、どこどこにいるか、教おしえてください。見みつけたら知しらしてくれらいうといいつて約やく束そくをした風かぜは、まだなんともいいつてきてはくれません。世せ界かいじゆうのこことがわわかるなら、ほかのこことはきききたくありありませませんが、私わたしの子供こどもは、いまどこにどうしているか教おしえてくだください。」と、あざらしは、月つきに向むかつて頼たのみまました。

つきは、この言葉をきくと黙つてしまいました。なんといつて答えていいか、わからなかつたからです。それほど、世の中には、あざらしばかりでなく、子供をなくしたり、さらわれたり、殺されたり、そのような悲しい事件が、そこそこにあつて、一つ一つ覚えてはいられなかつたからでした。

「この北海の上ばかりでも、幾ひきの子供をなくしたあざらしがいるかしのれない。しかし、おまえは、子供にやさしいから一倍かな悲しんでいるのだ。そして、私は、それだから、おまえをかわいそうに思っている。そのうちに、おまえを楽しませるものを持つてこよう……。」と、月はいつて、また雲のうしろに隠れました。つきは、あざらしにした、約束をけつして忘れませんでした。

ある晩方、南の方の野原で、若い男や、女が、咲き乱れた花の  
 なかなか ふうふう ふうふう 太鼓を鳴らして踊っていました。月は、この有り  
 さまさま そらそら うえうえ 様を空の上から見たのであります。

これらの男女は、いずれも牧人でした。もうこの地方は、

暖かあたたかかで、みんなは畑はたけや、田たに出でて耕たがやさなければなりませんでした。

一日いちにち野のららに出でて働はたらいて、夕暮ゆうぐれになると、みんなは、月つきの下したでこ

うして踊おどり、その日ひの疲つかれを忘わすれるのであります。

男おとこどもは、牛うしや、羊ひつじを追おつて、月つきの下したのかすんだ道みちを帰かえつてゆ

きました。女おんなたちは、花はなの中なかで休やすんでいました。そして、そのう

ちに、花はなの香かおりに酔よい、やわらかな風かぜに吹ふかれて、うとうとと眠ねむ

ってしまったものもありました。

このとき、月は、小さな太鼓が、草原の上に投げ出してあるのを見て、これを、哀れなあざらしに持って行ってやろうと思つたのです。

月が、手を伸ばして太鼓を拾つたのを、だれも気づきませんでした。その夜、月は、太鼓をしょって、北の方へ旅をしました。北の方の海は、依然として銀色に凍つて、寒い風が吹いていました。そして、あざらしは、氷山の上にも、うずくまっていたました。

「さあ、約束のものを持ってきた。」といって、月は、太鼓をあざらしに渡してやりました。

あざらしは、その太鼓が気にいったとみえます。月が、しばらく



く日をたつて後のちに、このあたりの海かいじょう上じょうを照てらしたときは、氷こおりが解とけはじめて、あざらしの鳴ならしている太鼓たいこの音おとが、波なみの間あいだからきこえました。

——一九二五・三作——



## 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 4」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷

1977（昭和52）年C第2刷

底本の親本：「小川未明童話全集 4」講談社

1950（昭和25）年

初出：「愛の泉 8号」

1925（大正14）年4月

※表題は底本では、「月《つき》とあざらし」となっています。

※初出時の表題は「月と海豹」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：館野浩美

2017年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 月とあざらし

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>